

## 教師の成長を促す『できる日本語』

嶋田和子

アクラス日本語教育研究所

浜松日本語学院 顧問

[kazushimada@acras.jp](mailto:kazushimada@acras.jp)

### 1. 日本語教師を取り巻く環境の変化を知る

例：文化庁「日本語教育人材の養成・研修の在り方について（報告書）」  
(2018. 3. 2) <「生活者としての外国人」、留学生、児童生徒等>

#### ◆整理のしかた

- 【役割】 (1) 日本語教師  
(2) 日本語教育コーディネーター  
(3) 日本語学習支援者

- 【段階】 (1) 日本語教師を三段階で整理  
① 養成 ② 初任 ③ 中堅

#### ◆「日本語教師【中堅】に求められる資質・能力」

知識、技能、態度

※詳細は、レジュメ 3 ページ「参考資料①」参照のこと。

### 2. 『できる日本語』で、教師が成長できる理由を考える ～実践例から学ぶ～

5つのポイント：「文化庁報告書」の「日本語教師に求められる資質・能力」より

<学習者に向き合う>

- ① 臨機応変に対応する
- ② 多様な選択肢を提示する
- ③ 学習者の学びに向き合う

<教師として成長する>

- ④ 振り返り、改善を図る
- ⑤ とともに学び合う

## メッセージ

- ◆ 学びをデザインする力量が、これからの教師に求められている。一言付言しておく、この授業のもう一つの魅力は、長井さんの子ども一人一人に対する細やかなまなざしと愛情あふれる対応である。

(佐藤学『学びの共同体の挑戦—改革の今—』(2018, 小学館, p. 118-119))

- ◆ 「教える専門家」から「学びの専門家」へシフト  
授業技術を中心とするものから、子どもの学びのデザインとリフレクション（省察）を中心とするものへと変化。

21 世紀の社会の変化に伴って、教師は生涯学び続けることなしには職務を遂行できなくなる。

(佐藤学『専門家として教師を育てる

—教師教育改革のグランドデザイン』(2015, 岩波書店, p. 42-43))

### 3. 『できる日本語』の使い方を見直す

#### ① 進度

適切な進度で進めていますか。

→ 思い込みの弊害：完璧にできるようになるまでやるのが大切！？

#### ② 授業での教師のあり方

・ 学習者の「持っている力」を引き出していますか。

・ 自律的な学びを大切にしていますか。

→ 思い込みの弊害：教師が丁寧に説明しないと、学習者は理解できない！？

※ 講演では、2点のみ取り上げます。詳しくは、『『できる日本語』説明ビデオ』等も活用してください。

## 『できる日本語』の根底にある「学びの共同体」の考え方

『目指せ、日本語教師力アップ—OP I でいきいき授業』(2008, ひつじ書房)

### 4 章 「学びの共同体」をめざして

4-1 「個人力」から「チーム力」へ

4-2 共に育て合う授業力

4-3 学校を変える「チーム力」

4-4 「学びの共同体」作りのための学内教師研修



参考資料①

日本語教師【中堅】に求められる資質・能力

※「知識・技能・態度」に分けて提示されているが、ここでは「技能・態度」について取り上げる。

	技能		態度
	<b>【1 教育実践のための技能】</b>		<b>【1 言語教育者としての態度】</b>
①	学習者及び関係者のニーズを踏まえ、日本語教育プログラムを策定し、運営することができるとともに、学習者の属性やニーズ等の変化に応じて臨機応変にプログラムを調整する能力を持っている。	⑧	日本語教育の専門家（中堅）として、日本語教育の社会的意義についての自覚と情熱を有し、自身の実践を分析的に振り返るとともに、新しい知識を習得しようとするなど、常に学び続けようとする。
②	日本語教育プログラムの中長期的な指導計画を策定する能力を持っている。	⑨	日本語教師（初任）や日本語学習支援者に対して、振り返りや学びの機会を積極的に提供しようとする。
③	日本語教育プログラムの目標に応じた学習者の学習時間、到達目標に合致した教材を選択・作成できる。	⑩	学習者や他の日本語教師と共に学び合い、成長していこうとする。
④	日本語教育プログラムを実施し、点検・評価を行い、改善を図る力を持っている。		<b>【2 学習者に対する態度】</b>
⑤	日本語教師（初任）及び日本語学習支援者に適切な助言をすることができる。	⑪	学習者が学びに向き合えるように様々な方策を用いて、共に課題解決に当たろうとする。
	<b>【2 学習者の学ぶ力を促進する技能】</b>		<b>【3 文化的多様性・社会性に対する態度】</b>
⑥	学習者の日本語能力を適切に把握・分析し、効果的な学習方法や教材等について多様な選択肢を提示することができる。	⑫	教育実践や課題、成果等を記録・発信し、教育実践の質的向上を生かそうとする。
	<b>【3 社会とつながる力を育てる技能】</b>	⑬	異なるビリーフを持つ関係者と円滑な関係を構築しながら、協力的にプログラムを運営していこうとする。
⑦	日本語教育現場における課題、自らの専門性における課題を把握し、関係者や他分野の専門家や機関・団体等との連携・協力により課題解決に取り組むことができる。		

## 参考資料②

### こんな「悩み」を抱えていませんか？

先日、A 日本語学校の教務責任者である B さんから、以下のような「悩み」相談を受けました。

うちの学校では『できる日本語』を使い始めて3年です。以前よりずっと学内での話し合いも活発になってきています。『できる日本語』の良さも魅力もよくわかっていると思います。

でも、なぜか学内にはうまく使えない人が多いのが現状です。新人教育などでも、「文法が隠れていて見えない」「マニュアルがあれば、うまく授業ができるのに・・・」という声が聞かれます。どうしたらいいのでしょうか。

そこで、私は自分自身で B さんに答えて終わりにするのではなく、イーストウエスト日本語学校の先生方に、次のような宿題を出しました。

A 校の「悩み」はなぜ起きるのだろうか考えてみてください。そして、それを自分自身の実践を振り返るきっかけとし、さらに B さんにアドバイスをしてください。  
(嶋田まで回答メールを送る)

学内のすべての先生から回答メールが届き、それを冊子にして講師会で配布しました。お互いの考えを知ることは、とても重要なことだと考えたからです。もちろんイーストウエスト日本語学校で出た「悩み」ではありません。しかし、同じ教科書を使う仲間として A 校の課題に共感し、自分の問題として考えることは大切なことではないでしょうか。

とても貴重な意見がたくさん出てきました。ここでは、その中から田坂敦子さんの返信メールをご紹介します(ご本人から許可を頂いています)。B さんと同じような「悩み」を抱いていらっしゃる先生方のお役に立つことを願っています。

「できる日本語」教材開発プロジェクト  
リーダー 嶋田和子

## 「ある学校の苦悩」について考えたこと

田坂 敦子（イーストウエスト日本語学校講師）

<http://www.dekirunihongo.jp/?p=971>

### 1. 実習指導をして感じていること

私は、かつて「みんなの日本語」を使用して日本語教師養成の実習指導をしたことがあります。また、現在は「できる日本語」を使用して実習指導を行っています。機関も受講生も異なるので単純に比較はできませんが、受講生の模擬授業があまりうまくいかない場合の、問題点に大きな違いがあると感じています。

「みんなの日本語」使用の場合は、導入→文法は丁寧すぎるほど説明し教えるのに「その文法をいつ使うのか？」「実際の言語行動として、何ができるのか？」がほとんど考えられていない授業がありました。導入はていねいにやるが文法の意味を教えるための導入にとどまり、具体的な使用場面の提示がなく、練習はオーディオリンガルの文型練習だけで、学習者自身のことを話す機会がないような授業でした。「それをいつ使うんですか」「その例文を実際の生活で言うのでしょうか」「実際に使用する場面は何でしょうか」ということを受講生によくコメントしていました。

一方、「できる日本語」使用の場合は、具体的な使用場面の提示は（教科書通りなので）できるものの、チャレンジを一度聞かせるだけで文法の導入も終了、それだけで学習者がもう言えるようになると思ってしまう、文法のポイントの提示や練習が不十分のまま、言ってみようをサラッと流し、先に進んでしまう、という授業が見受けられるようになりました。「その文法練習の大事なところは何ですか」「ここで出した文型は前のとどう違うのでしょうか？」「意味が分かっただけでは言えるようになりませんよ」というようなコメントを受講生にすることが多くなりました。

理由を考えてみました。

「みんなの日本語」は、教科書の順番通りにやっても授業が作れない、ということが明らかな教科書だと思います。各課に例文として文法項目のリストはありますが、意味の導入の仕方は書かれていないので、マニュアルを見たりして、ここはどうやったら意味が分かるだろうか、どんな絵を見せたらいいだろうか、どんな練習が必要だろうかと考え準備することが必要です。そうしないと授業を組み立てられません。そのため文法について教師自身がかかり勉強することになります。（その結果、文法だけの授業になってしまうわけですが…）

一方「できる日本語」では状況イラストとチャレンジがあるので、「これを見せて、聞かせて、言ってみようにすすめばいいんだな」と、教科書に甘えすぎて、そこで教える文法項目のポイントはなんなのか、なぜこの順番なのか、と自分で考えることが甘く

なることがあるように感じます。授業の流れの段取りは間違っていないが、教師自身ポイントが押さえられていない、ということです。

文型練習も、なぜこの例文なのかということを考えないで「ここに載っているのをやればいいでしょ」と、極端に言えば、教師自身がわかっていなくてもなんとなく授業らしきものができてしまうのではないのでしょうか。

おかしい言い方になるかもしれませんが、

「みんなの日本語」は、使い勝手が良くないので準備の際よく考える→勉強する

「できる日本語」は使い勝手がいいため教科書に甘えてしまう→勉強しない

ということが起こっているのではないのでしょうか。

「隠れている文法が見えない」ということですが、文法は隠れていないと思います。

「ポイント・言ってみよう・シラバス一覧・文法ノート等を見ればわかると言われるが、分からない先生が多い」ということについては、それらを見てわかることは、教えるべき文法項目であって、その項目のポイントというものは教師自身が勉強して分かっておかなければならないものだと思います。教師が勉強しなければならぬのはどんな教科書を使っても同じです。

## 2 「新しい先生」の2パターン

「熱心に学内研修を実施している」とのことですが、「新しい先生」に対して研修すべきポイントが、少し違うのかもしれないと思うことがあります。

「新しい教師」には以下の2種類があると思います。

- ① 「できる日本語」を使用するようになる前に、「みんなの日本語」など構造シラバス中心に文法を教えてきた（実習含む）経験がある教師。
- ② 「できる日本語」が初めての教科書である、教え始めたばかりの教師

「できる日本語」を使用するようになる前に、「みんなの日本語」など構造シラバス中心に文法を教えてきた経験がある教師は、文法についてかなり勉強してきたと思います。そして、その文法をどのように教えたらいのか、どのように練習したらいいのか、どのような活動に結びつけたらいいのかと苦労した経験の上で、「できる日本語」を見ると、この教科書がいかに工夫されており、使いやすい教科書であるかがわかるでしょう。この場合問題はありません。「かなり力のある先生でないといえぬ」という意見の「力のある先生」というのはこのような教師を言っているのではないのでしょうか。

あるいは、文法中心の教え方が染みついている教師が「できる日本語」が使いにくいというのであれば、Can-do という考え方をわかってもらうための研修が必要だと思います。しかしこの場合は、「文法が隠れている」とは思わないでしようから、ここで問題になっている「うまく使えない」ということとはまた別の問題でしょう。

しかし、初めて使う教科書が「できる日本語」である新しい教師は、ひょっとすると初級文法の重要なポイントがまだ十分わかっていないかもしれません。そこがわからずに、場面、話題、活動が強調された教科書を使うため、文法が「隠れている」ということになってしまうのではないのでしょうか。

文法中心に教えてしまう教師に対して話すトーンで「大事なのは言語知識だけではなくて言語使用だ」「場や話題が大切だ」という言い方ばかりをすると、前提として「文法は大切だ」という意識がそれほどない場合、文法についての考え方が甘くなってしまうのではないのでしょうか。このような教師には、教科書で場面や会話例は用意されているので、むしろ「ここで教える文法のポイントは何か」ということを確認する必要があります。それは前者のような教師とは逆のことだと言えます。

文法知識と、その大切さはよくわかっているがプロフィシエンシーの考え方に欠ける教師に必要な研修と、文法がよくわかっていない教師に必要な研修は違うということです。

私は、「できる日本語」を使った実習指導をしてこの点の考えが不十分だったという反省があります。

### 3 自分自身を振り返って

私自身は、言語知識中心の教え方から、Can-do という考え方へとシフトしていく経験をしました。しかし、そのようなシフトではなく、むしろ文法についての知識が不十分な方に対して「できる日本語」の使い方を教えるとき、自分とは違うのだなということを感じます。そのようなところでも、いかに自分が自分を基準としているか気づかされます。

「できる日本語」は、せつかく言語知識と言語運用の両面が押さえられている教科書なので、その両方が生かせるような使い方を、伝えたいと思っています。